

No. 97 公民館だより

平成7年12月
宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

由良岳・森ヶ鼻道によせて(四)

館長 山下 清 一

紅葉に映える由良岳の姿は、私にとり、気に入った景色の一つです。秋も深まり冷え込みが感じられると共に、ようやく紅葉が見られるようになりました。今秋は少々、いろ褪せているようです。松の立ち枯れが目立ち、気に掛かります。山の姿は、漸く仕事を終え、着物に着替え眺めを待つ、ゆったりとした気分

に満ちているようです。日が落ち、冷え始めた晩秋の森ヶ鼻道をゆっくり帰路の歩を進めながら、仕事を終えた田畑を眺めていると、子供のころか

ら「ズーッ」と、登下校や通勤の道々で気軽に声をかけて下さったり、農作業の手を止め、やさしく挨拶に答えて下さった今は亡きおじさんやおばさんの姿が、かつての蛇行した旧道や田や畔を透して懐しく思い出されて来

るのです。また、晩秋の夜おそく、仕事の帰り路、暗闇の中で落葉を踏み自分の足音や風に流される落葉の音、「サクサク、カサカサ、カラカラ」、誰かに後ろからつけられていたような錯覚と恐怖に怯え、じつとりと冷汗を感じ

つつ帰路を急いだことも、一度や二度ではありません。

子供のころのおぼろげな記憶ですが、森ヶ鼻の緩い坂道を登りきり、対岸の川沿いに山道を辿ると山懐に抱かれた陽当たり

さり、何時もよいもの(菓子や飴)を振る舞って下さり、学校の話をしたり、飼っておられる鶯や山雀等小鳥の話、生捕りや餌付けの方法を教えてくださいました。子供達を度々山の養魚場へ通わせしたのは、おじいさんの子供好きの優しさも然る事ながら、あの「よいもの」にあつたのだと思います。

のよい山裾に、鮭の孵化養殖場が建っていました。秋から春にかけて、吉岡のおじいさん(重蔵さん)が常駐されており、稚魚の世話や水の調節管理の仕事がされていました。建物の大きさ等は定かでありませんが、窓は透明ガラス戸で、窓枠は白ペンキが塗ってあつたのを覚えています。森ヶ鼻川から取水された谷水は、木製の樋を伝い水槽に流れこんでいました。長さ三メートルくらいの水槽が幾列も並べられており、目高くらいの鮭の稚魚が遊泳していたのが目に浮かびます。

学校の帰りや休日などに、二三の友と遊びに訪れると、人懐こい笑顔で、住み着いている赤ブチの野良犬と一緒に迎えて下

五十数年振りに山道を辿り、養魚場を訪ねてみました。曾ての細い山道は改修され、畑の地形もすっかり変わり、養魚場の跡には、椎茸の櫛木の貯蔵倉が建ち並び、成長した杉や樺の大木が生い茂り、鬱蒼として仄暗く、当时を偲ぶ跡形は何も残っていませんでした。振り返ると、田んぼに続く鉄道をこえて、浜野路、港地区の家並の上に、青く広い若狭の海。今も変わらぬ冠島の姿。神崎の浜に打ち寄せる白波が二、三条、晩秋の陽光に美しく映えていました。

行事報告

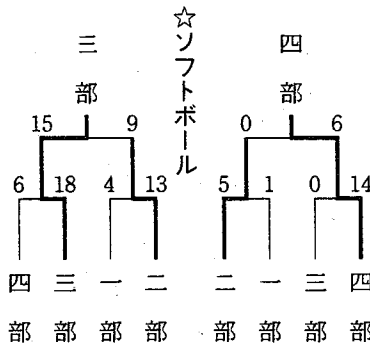
主事 酒田 治

●四部対抗球技大会

八月十四日(月)

一年、歳月の流れは早いもの、お盆の球技大会が来ました。「やあー、おうー、元氣」なんて、声を掛けたりかけられたり、昨年を思い出しながら、楽しい中にも対抗意識もチラリと出て来る暑い暑い一日でした。皆様、お疲れ様でした。お元氣で!

☆野球



●盆踊り大会

八月十四日

太陽が山の向うに落ち、少し涼しくなってきたかなと思うころ、由良小唄のテープが流れ、婦人連先頭で踊りの輪が大きく膨らみ、小さく、また大きく、色とりどりのボンボリにそよ風が吹き始める頃、盆踊りもいよいよ終わりに近づいて来ます。また来年、もっともつと沢山の方の参加をお願い致します。当日、公民館は、分館長さん、体育部、文化部——と、時間、場所を別に、早朝より夜遅くまで頑張つて参りました。皆様、ご苦労様でした。

●由良地区大運動会

九月三日(日)

由良地区全体行事で、各地区では、二四〇オリレー、最後の四部対抗リレー等々、選手選考

にご苦労を重ねられたことと思

います。公民館も七月より何回

となく会議を、また準備にと取

り組んで参りました。でも、そ

の苦勞も一瞬の内、雨となり止

むなく中止せざるを得ない状態

になってしまいました。

開催に向け色々ご尽力願った

自治連合会、ご協力下さいまし

た各団体、地区の皆様、本当に

有難うございました。

●四部対抗グランドゴルフ

十月十五日(日)

天候も上々、ナイターで涼し

い夜風を受けながら、最近人気

急上昇中のグランドゴルフを充

分満喫していただいたことと思

います。成績は次の通り。

ホールインワン 瀬田 吉雄

優勝 第三部 山田美恵子

部	打数計	順位
一部	280	3
二部	306	4
三部	247	1
四部	268	2

●宮津市市民対抗駅伝大会

十一月三日(金)

二年間出場していなかった空

白を晴らすかのような絶好の駅

伝日和。出場チーム、十チーム

が市役所をスタート(一・五

キロ、走者六人が栗田半島に挑

戦します。我が由良クラブも連

続優勝の意地をかけ力走しま

したが、やはり二年間のブランク

が大きく禍いし残念ながら次の

成績に終わりました。出場され

た選手の皆様、有難うございま

した。

第六区・区間賞 北野剛教

第一位 橋立府中チーム

第二位 上宮津体協A

第三位 由良クラブ

●文化祭(婦人会と協賛)

どこまでも澄んだ青い空。開

催準備は着々と進み、時間前よ

り婦人会のバザー会場は忙しそ

う。そのうち三々五々と会場は

賑わいを増し、昼前には大盛況

となつて参りました。

二階会場は、お茶席をはじめ

文化祭

とし、生花が会場をぐるりと囲むなか、特別出品をお願いした西野さんの絵画、写真、ちぎり絵、手芸、小・中学生の絵、習字等々、出品点数二三五点。屋外の盆栽一八点を合わせて二五三点の多くをご出品願ひ、多く

の方々の目を楽しませていただき有難うございました。

他方、婦人会のバザー会場、有志の喫茶コーナーも大盛況で忙しいなか、皆様のご協力により無事終了出来ましたことを厚くお礼申し上げます。

小田原 昭子

をそろえて十時の開店を待ちます。

外では公民館の役員さん達に TENT を張っていただき、バザーの準備。早くからお客さんが見えて、品物を並びおえるまでに「これはいくらですか」「あれほしいわ」とあわただしい店びらきでした。例年のように余剰野菜、干物類、砂糖等取りそろえていたのですが、売り子さんのすばらしい美声で完売。地域の方々とのいろんな会話の中に

ほんのひとときのふれあいを感じ、心がなごみました。

バザーが終了する頃には、調理室はすごい熱気でムンムン。役員一人一人が自分の役割を一生懸命こなしています。にわかウエートレスさんが「うどん一つ、ぜんざい一つ」と注文。それに答えて裏方さんは大きな声で復唱。その声にみんな景気づきます。お昼の時間帯は大勢の人達で大変な賑わいとなり、座る所も順番まち、持ち帰りの人も並んで待つていたたく状態で、ご迷惑をおかけしたことと申します。時間も終わりに近づくと顔もなごんできて、疲れると同じ時にみんなと一緒にやりおえたという満足感でいっぱいでした。「おいしかったよ」「ごちそうさま」肩をたたいて「ごちそうさん」と声をかけていただいたこと等はとても嬉しく、感激しました。一方、ロビーではコーヒーを飲みながら談笑されたり、ビデオ鑑賞する人。二階では、

すばらしい作品がところせましと展示されていきました。絵画、書道、生花、写真等、どれを見ても力作ばかり。でも、ゆっくりと鑑賞できなかったのがとても残念でした。和室ではお茶のお点前が行われていて、無作法な私、緊張しながらも、あわただしい日のつかの間の一服でした。本年の文化祭が盛会に終了することができましたことは、あたたかくご支援いただいた地区の皆様のおかげと、心から感謝しています。これからも地域に密着した婦人会活動を頑張っ

て行きたいと思しますので今後ともご指導をよろしくお願い致します。

公民館行事の一つとして毎年開催されています。文化祭。今年も十一月五日、さいわいにも天候に恵まれて盛大に行われました。

前日から下準備をして当日にそなえていたのですが、不安で「何か忘れてはいないか」「あれはこれでよかったね」と確認しあつてのスタートです。婦人会のメインであります、うどん・ぜんざいを食べていただく部屋には、テーブルに花を飾り、器



砂浜教室

由良小学校長 梅垣勝彦

由良川河口から奈良海岸まで延々と続く美しい砂浜は、由良の地が大いに誇りとすることが出来る素晴らしい自然といえるでしょう。多くの海水浴客で賑わった夏も過ぎ、静けさを取り戻した秋の砂浜には、時には人の姿ひとつなく、精緻な風紋と波の音、松林を通り抜ける風の音だけが主人公です。

渚を歩きながら考えました。学校のすぐ近くにあるという地理的条件を生かし、この砂浜をもっともっと教育に活用することはできないだろうか。たとえば、「由良小学校砂浜教室」として位置付けてみてはと。

砂浜や渚に生じる草花や昆虫や小さな魚の調査・観察や飼育、砂浜の特徴を利用した運動に面白い遊び、砂を素材とする造形

活動、砂浜形成と由良川、消波ブロックの役割やその変遷の研究、砂浜と由良の人々の関わり、の勉強、そして美観を守る浜掃除・看板づくり等の奉仕活動等々、砂浜には子どもたちの興味、関心を惹くものがあります。砂浜が子どもたちに与えてくれるものがたくさんあります。

学校で、あるいは全校で、教科で、特別活動で、更にはクラブ活動で、積極的に取り組んでいけば、学校の特色ともなるでしょう。そして、こうした活動を通して、砂浜を、由良ヶ岳や由良川を含む豊かな自然を、子どもたちにもっと身近かなものに育てていきたいと思えます。

教育課程編成、安全確保のための方策など、課題はたくさんありますが、これまでも取り組

んできた砂の造形活動や浜掃除 展策について、みんなで検討し
等をベースにしながら、その発 てみたいと考えています

川柳

宮津番傘川柳会

生きがいにつゞける趣味も時には苦

孫の守り終ればふき出る疲れかな

山下節子

走馬灯絆は強くよみがえる

十二月けじめ付けるに慌ただし

山田寿美

年の暮心のメモを消し残す

一瞬の油断人生狂わせる

藤本喜代子

小言聞く耳は持たないイヤホン

黒衣の手人形に血を通わせる

坂本妙子

四部対抗野球に参加して

藤 本 長 宗

今年も、連日三十度を越す猛暑の中、例年通り、八月十四日早朝より四部対抗の球技大会が開催され、僕は四度目の参加となりました。

選手の皆さんをはじめ、企画準備下さいました大会役員の方々には、真夏日の中、本当に御苦勞様でした。

チームは即席で構成され、相変わり意気投合するといった具合で、一味違うチーム、それがまた面白く、野球、ソフトボール共に好プレーや珍プレーが随所に見られ、参加者全員が、楽しいお盆の一日を過ごす事となりました。

ソフトボールで、プレー中に思わぬアクシデントが生じ、全員心配を致しましたが、大事には至らずホッとしました。

お互い、ハッスルプレー中の出来事だけに非常に残念な一場面でした。

由良地区も若者が減少している今、参加者が少なく、運営委員の方々も選手集めに大変だと聞いています。僕は幸いに地元で就職が出来、年に何度か地区の行事に参加させてもらい、諸先輩方や後輩とのつながりがあります。地元を離れた方々は、お盆の帰由を機会に一人でも多くの人が参加されます事を望み、また継続させて行く事が大切かと思っております。

最後になりましたが、四部対抗球技大会をお世話下さいました皆様にお礼を申し上げます。

四部対抗球技大会に参加して

大 森 由 生

八月十四日、この日は他県へ出稼ぎに行っている私の、数少ない帰由の楽しみの日である。永年の歴史を持つ当地恒例、皆様ご存知の四部対抗球技大会の日である。若かりし少年時代は軟式野球、恰幅(腹)の出で来た壮年期にはソフトボールと、幾つになってもボール遊びは楽しいものである。

小学生の頃、親父に野球のイロハを教えてもらって以来、ボールとバットの魅力に取り付かれ、勉強そっち除けでボールと遊び回った幼少の頃、今でもその頃から解放されず、この日を真夏の楽しみとしている。

このクソ暑いのに野球だ、ソフトだど何が面白いのか？ 家の中の涼しい場所で高校野球のテレビ観戦でもしている方が余

程マシだと思われる御仁もおられると思われませんが、年に数回しか帰由出来ない私の、同級生、先輩、後輩等との再会、情報交換の場として、数少ないコミュニケーションを図れる場所に活用させていただきます。

プレー中は、お父さん、中には孫もいる好々爺も、年齢を忘れ、一つのボールを追っかけ、プロ野球顔負けの好プレーに拍手喝采、また珍プレーに出っ腹抱えて大笑いと、普段は見ただ事もない人となりにお目に掛かれる機会でもあります。

中でも一番の楽しみは、ゲーム終了後の、日の出食堂での「冷しうどん」をツマミに飲むビール旨さ。勝っても負けても一汗かいた後のこのビールの味は格別である。

私、当地区の公民館活動は何一つお手伝いしておりませんが、せめてこのビールを飲む事くらいは毎年手伝わせていただきたいと思っています。

お盆の帰由の目的は、平成三年に他界した親父の墓参りが表向きであるが、本音はこれが第一目的である(親父におこられ

るかも)。だから、雨で中止になると非常に残念に思う。

役員の皆様、私の楽しみをなくさないためにも、この伝統ある大会がいつまでも続きますように、御苦労様ですがお骨折ります。

来年もまた、楽しみにしております。

グラウンドゴルフ大会に参加して

浜の路 吉 田 あい子

由良地区の誰もが気軽に参加できるフィットネススポーツとして取り組まれたグラウンドゴルフ大会に、今回参加させていただきました。

市教委の方の指導のもとに一回したきりですが、飛びはねることも走り回ることもなく、幅広い年齢で楽しめるスポーツだと思いました。坂あり、草むらあり、石ころありでした。ねらっ

て打っているはずなのに、はがゆい所で玉が止まったり、とんでもない所に行ってしまったりもしました。ホールインワンすることは本当に大変なものでした。それでも、男子は三部から、

女子は四部から、一名ずつ、ホールワンされた方がありました。調子が上がって、その気になって終了。もう一回りすればもう少しなんとか、そんな思いがみ

んなの心の中にあつたようでした。

チーム内でひやかしあり、はげましありと笑いのある、一コース八ホールでした。他のチームの人達はどんなだろうとも思っ

て歩いていました。

それと、激しいスポーツは出来なくても、気軽に出来るゴルフの感覚で参加された人もあ

がりもあっていいのではと思いましたが。お忙しい役員の方々に勝手なことを言いますが、何か良い方法で参加者の幅を広げて下さい。よろしくお願いします。後になりましたが、楽しいひとときを有難うございました。



脇の祭り

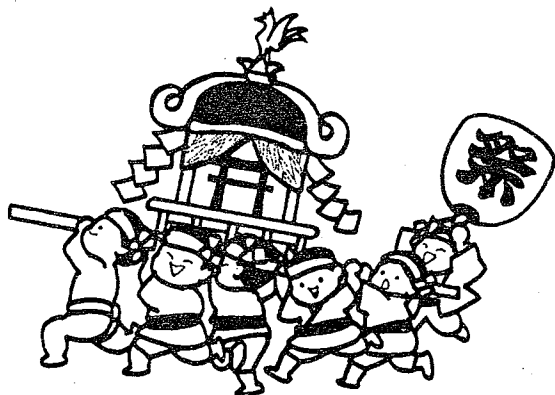
中 西 衛

今年も奈具神社の祭礼が、例年の如く十月十日に行われました。今年の特に、前夜祭、宵宮を公民館横の岡本工務店さんの駐車場を借りて行ったため、大いに盛り上がりました。祭りはまず十月一日より太鼓と踊りの練習より始まります。女の子十八人は踊りで、磯野先生の指導で二階で行われています。婦人会の踊りも二階です。男の子二十七人は太鼓で、指導者は小林熊一郎さん、小田原利晴さんです。每晚七時半より九時まで熱心に練習します。その間、区長さんをはじめ役員さん方は毎晩詰めておられ、また壮年会、新生会の有志が前夜祭の準備のため、色々作業されています。綿菓子、棒作り等です。笛の練習もあります。男の子の太鼓も、

人により上達の程度は違いますが、三年間が過ぎて、小学二年生くらいになって、ようやく、まあまあ一人で打てるようになりました。十月九日夜、いよいよ宵宮が始まります。三年くらい前より壮年会、新生会の皆さんの力により、おでん、ヨーヨー、綿菓子の出店、風船の配布、ぬいぐるみの散歩等が行われるようになりました。会場の設営の準備がなかなか大変です。おでんは前日より、ヨーヨーのおくらまし、風船の準備、カラオケ会場の設営、照明の取り付け等々です。太鼓の仕上げと子供、婦人会の踊りがあり、大勢の人が集まりました。今年も雨も降らず、自動車の心配もなくてよく、最高の宵宮でした。

さて十日の本日は、朝八時より公民館前で踊りと太鼓が始まります。一通り終わると太鼓の乗った山車を子供達が引いて、まず西の方へ巡行します。太鼓を打ちながらです。最初に左近さん宅前で踊りと太鼓、その次に岩上さん宅前で女の子が踊っている間に、男の子は山車を引いて稲荷の石田さん宅前まで行き、太鼓を一通り打って引き返します。公民館で一服した後、東の方へ出発します。巡行最中には役員さんが、茶わん酒とカマボコ、ちくわを持って接待されます。坂下さん宅前と区長さん宅前と前畑さん宅前で踊りと太鼓を一通り打って、いよいよ奈具神社へと向かいます。十一時過ぎに神社に入ります。神事の祈禱の後、踊りと太鼓が奉納されます。その後、他所から来た神楽を見物します。ゴザの上で茶わん酒を飲みながら、太鼓の打ち納めを見て、大体祭りが一時ごろ終了します。

子供が主体の素朴な祭りですが、いつまでも続いて、どんどん盛り上がって行って欲しいと思います。



宮津市民駅競争大会に参加して

—— 駅伝とは ——

北野 剛 教

最近、ジョギングや散歩をし

ている人をよく見かける。これは、健康の維持、増進はもちろんのこと、身体を動かすことにより、脳の働きを活発にし、気分爽快にさせる働きがある。また、「歩くこと」「走ること」は運動の基本であり、手軽に行うことができる。時間をつくって毎日の習慣にできれば、生活に「生きがい」が出てくることと思う。

去る十一月三日に、第二十五回宮津市民駅伝競走大会が、晴天に恵まれ行われた。我が由良チームは過去三度優勝経験のある、実績あるチームである。もちろん今年も「優勝」の二文字を目指していたわけだが、惜しくも三位入賞にとどまる結果で

あった。

「駅伝競走」という言葉を辞書で調べてみると、「数人でチームをつくり、各人が所定の区間を走り、着順または総所要時間によって勝敗を決める」と書かれている。この言葉の通り、駅伝は個々の力が一つに集結され、その結果がチームの成績となるものである。走っている途中で、「もうあかん。走れん」と思う時や、「よし、今日は調子がいぞ。いける」と思う時など様々である。一人一人が任された区間を責任を持って走る。「少しでも前へ進もう。後の人に楽に走ってもらおう」という気持ちが大切である。調子の良い人、悪い人。全員が調子良く走ればいうことはないが、なかなか

うまくいかないものである。調子の良い人が悪い人のタイムをカバーする。一人一人の努力の結晶が汗となり、一本の「たすき」で心をつないでいる。

これが、駅伝の素晴らしさであり、私が陸上競技を指導する中で、駅伝が一番好きな理由でもある。

今回、充分な練習を積んでレースに臨めたわけではないが、走っている途中での沿道の方々の「頑張れ」と拍手をしながらの熱い声援。「頼んだぞー」とたすきを渡された時の様子。「ここまでみんなが頑張ってきたんだ。僕も頑張らなければ……」という使命感。様々な光景が励みとなり、苦しさを忘れ、知らぬ間にゴールしていた。

優勝はできなかったものの、何とか三位に食い込み、賞状を手に入れることができた。また、ゴール地点で迎えてくれたチームメイトの嬉しそうな、「ホッ」としたような笑顔は、脳裏に焼

き付いて忘れることができない。この感動があるからこそ、「また、走ろう。次はもっと頑張ろう」と思うことができるのだ。

個々の力の集合体。少しでも、後の人に楽に走ってもらう。自分はやるべきことはやったんだ。あとは任せた。頼んだぞ。様々な気持ちを、たすきに込め、一つの目標。ゴールに向かって走っていく。走る人と応援する人とが一体となり、心をつなぐ。これがまさしく、駅伝である。

「風に乗れ、君の声援、君の汗」これは、今年の鳥取インターハイの標語である。チームメイトがあり、応援してくれる人があるからこそ、私は走り続けようと思えるのである。

「平和で安全な地域づくり」のために

由良駐在所 森 田 浩 志

一、はじめに

「95年」は、震災に始まり、オウム事件、度重なる銃器犯罪と、今世紀まれに見る激動の一年でありました。これまでも、犯罪の傾向としては年々広域化・スピード化しており、警察でも組織の強化が叫ばれていたところでもあります。「世界一治安の良い国」という意識の上にあぐらをかくことなく、新たに発生・凶悪化する犯罪に立ち向かうため、力強い警察を目指すところでもあります。

二、地域安全活動について

「平和で安全な地域づくり」のために、交番・駐在所が中心となり、地域住民や各団体と連携をとり、地域生活に密着した犯罪・事故の未然防止を図ろうという主旨で実施している活動であります。これまでも防犯運動の名で実施されてきましたが、より一層地域に密着した活動を、ということ、地域安全運動と名付け、住民と身近な関係にある交番・駐在所が、地域安全センターとしての役割をにない、より安全な地域づくりを目指そうと考えています。

三、年末防犯について

年末を迎え、各家庭においても慌ただしい日々になるうかと思えます。十二月は、他の月と比べても事故や犯罪の発生率が高く、普段より強い警戒心が必要です。特にお金の出入りが頻繁になることから、銀行や郵便局帰りを狙った「すり」・「ひったくり」が多発すると予想され、警察でも、金融機関及びその周辺の警戒を強化するところであり、

ります。しかし、皆さん一人一人の防犯意識が一番の未然防止策であることは事実です。一年の締めくくりとして、もう一息気を引き締めて年末を過ごされることを願います。

◎すり・ひったくりの被害にあわないために

☆道を歩く時は、バッグ等の貴重品の入っている荷物は、建物のある側に持って下さい（バイクや車で、追い抜き際にひったくられるというケースが多い）。

☆自転車の前かごに入れる時は、容易にひったくれないようにする（不要な荷物や古雑誌などでカバーする）。

◎車上狙いの被害にあわないために

☆車内の座席やフロント等、外から容易に見えるところにバッグや財布などを置かない。

☆ドアロックせずに車から離れない（キーを付けたまま、絶対に車から離れない）。

☆自転車やバイクのかごに貴重品を乗せたまま、その場をばなれない。

車上狙いの場合、ほんの二、三分の間に被害にあったというのがほとんどです。短時間だからといって油断は禁物です。たとえトランクやダッシュボードの中に入れていても絶対安全とはいえません。大切なものは手に持って出る方が良いでしょう。

四、おわりに

十一月に大阪で開催されたAPECにおいて、大阪だけでなく、あらゆる所で検問等を実施しました。一日に何度も検問にあつた方もおられるかと思いますが、皆さん快く応対していただきました。この場をお借り致しまして厚くお礼申し上げます。私が由良に来て早くも九カ月、公私ともに皆さんにはお世話になり、感謝しています。これからもどうぞよろしくお願い致します。

文学の見える風景(八)

上田三四二「夏行」その一

中西夏江



昭和53年9月18日 撮影

小説「夏行」は、昭和五十六年（一九八一年）文藝誌四月号に発表されました。

上田三四二氏は、医学博士で歌人、作家、文芸評論家、また宮中歌会始選者（昭和五十四～五十九、六十二～六十三）、日本文芸家協会理事等、他方面にわたって活躍。その間、亀井勝一郎賞、沼窪賞、平林たい子賞、野間文学賞、日本芸術院賞、川

端康成賞、文部大臣賞など数々の業績による受賞の後、平成元年一月、六十五歳で死去されました。

現在の由良の里センターの地には、かつて海水浴客で賑わった木造三階建の旅館「日進館」が、昭和二十年（一九四五年）から「京都府立健康教育研究所」として運営されてきました。

昭和二十七年、上田三四二氏は健康を害し、ひと夏をここで保養されました。

その頃の夏の由良を舞台として書き上げられたのが「夏行」です。

なお、この「夏行」の連作が、昭和五十九年（一九八四年）文藝誌二月号に「冬暦」と題して（上田氏の冬の佐渡における医

師生活を描いた小説）発表されました。

そこには、佐渡の郷土史家との対話で、『山椒太夫』で名高い厨子王の母親が、粟の穂の番をしながら鳥追唄を歌った「鹿の浦」海岸の件や、「由良と佐渡——香村（小説の主人公）の人生のなかで、灯のような意味をもつ二つの地縁は——略——」というような文章も書かれています。

昭和五十九年、二つの小説は「夏行冬暦」の書名で単行本として発行されました。帯文には出版社が、

《夏の由良、また雪の佐渡で、自らの来し方方向を見つめる壮年の医師——彼を包み込む人生の結節点の翳りと仄明りを、余情深い端正な文体で描く連作中篇小説》と記し、更に著者は、その静かな抒情と、原風景に寄せる愛着を次のように述べています。

《二双の屏風》 上田 三四二
事実よりも真実なるもの、
真実のより詩的なるもの——
そういう心得で書いた、これはわが経歴における「詩と真実」だと、あえて言おう。それを夏と冬、二双の屏風にくっつけた。

年齢の季節は前者は夏にやや早く、後者は冬にまだ間があるが、人生の二つの結節点における土地と歳月によせる作者のおもいは年とともにふかい。感傷を責めないで、教養小説の二変種として読んでいただければ、有難い。

「夏行」は、次のような書き出しから始まります。

「香村が大きな旅行鞆を提げて丹後由良の駅に降りたとき、十二時半をすこし過ぎていた。

以下、抜粋をしながら作品の紹介をさせていただきます。

P 8 降りたホームの後ろは

青田が拡がっている。ジーセルカーの出で行くの待って、駅員がホームの中ほどにある鉄板をあげた。そこから降りて、線路を横断する。渡った側のホームに改札口があった。

—略—
彼は日盛りの道に出た。駅前
の広い道はすぐに尽きて、古い
村の道にT字型に交わる。

—略—
P9 「京都府立健康教育研
修所」と書いた木の札がかかっ
ていた。門から上り勾配の前庭
になって、その奥に、長い一棟
の木造二階建の建物が立ってい
るのが見えた。中央の部分が三
階になっているので、大きく、
いかめしくみえる。
格式のある旅館を思わせる広
い玄関に立って声をかけた香村
を、引つつめ髪に簡単服を着た
中年の女が出迎えた。

P10 二階は十四ほど間数
があった。—略—香村は彼

の部屋とは反対側の北側の廊下
に出た。一望に海がひらけ、沖
に、腕を伏せたような島が見え
る。右手にもう一つ、寄り添う
小さな島があった。その遠い二
つの島影は、海の眺めをいつそ
うはるかなものにしていた。波
打際は手前のすこし高まった松
林に遮られて見えない。松林は
左手、東の方の一劃でちよつと
した丘になっていた。松林と研
修所との間に新道らしい真直ぐ
な道が通じている。トラックが
通った。すると香村のいる二階
の家は、その大きな構えからは
信じられないほどつよく揺れる
のだった。

彼はぎしぎしと音のする階段
を踏んで下にも降りてみた。階
下には事務室や医務室や食堂が
あった。その奥に炊事場や風呂
場などがあるようだった。
※ 松風の音をききながら微睡
んでいる香村の部屋に、「洛

南高校の高岡です」と同室に
なる男性が入って来ます。

「西京高校の香村です」——
二人一室を単位とする生活が
始まることになりました。

P14 「短歌をなさるん
ですか？」

高岡が驚いたような声を出し
た。取り出した本の中に「斎藤
茂吉全集」があった。—略—
「ええ、ほんのすこし。」
香村は赭くなった。—略—
「それはいい。」

高岡は嬉しそうに頷いた。そ
して、

「ぼくの方はこれです。」
※ 高岡は美術の教師で、日本
画のグループに属し、勤めな

がら画家の道を志しています。
病気をしてから、絵よりも俳
句の方に熱心になったという
ことで「馬酔木」の雑誌や
「石田波郷句集」を出したり
して話し合い、お互いに親し
みを覚えます。

そのうち、隣室にも小学校
の教師達が入って来、やがて

食事の時間になります。

P16 細長いテーブルの両
側に、床几のような腰掛が置い
てある。知らない顔が三人ばか
り席についていた。香村は目礼
して高岡と並んで坐った。鯨に
沢庵、飯は丼に盛ってある。そ
れだけであった。—略—
※ 夕食を終えた二人は海岸に
出ます。「博奕岬」や由良川
河口の情景が、爽やかに美し
く描写されていきます。

P17 由良川の河口は広く、
洲によって二つに分れながら、
豊かな水量を海に注ぎ入れてい
た。中洲をはさむ二つの水の流
れは、香村らのいる岸の側の方
が急であるらしく、注いで海
水と交わるところに出来る波立
ちの白々とした夕べの輝きが、
沖に張り出している。

(以下、次回へ)

緑のじゅうたん羊の国へ

山下 よし子

今回のニュージーランド旅行日程の中、ネルソン市での二泊三日は、公式行事へ参加という市民訪問団の一員としての責任と緊張感がありました。私には念願かなっての二度目の海外旅行でもありました。

長年英語に関わっていますが、学校英語の域を出ない私が、図らずも市長さんの公でのあいさつ文を英語に直し、それを通訳するという大役を引き受ける羽目になってしまいました。四十代後半だったら迷うことはなかったが、鈍くなり始めた頭をかかえ考えました。

今、IOHで若い人たちが国際交流に取り組んでおり、国境の垣根を越えてふれあい、グローバル社会に対応することを目ざしているのです、その基盤

づくりにプラスになればと思います、やってみることにしました。

何回も原文を読み、書いては消し、読んでは言い直して、たくさん時間がかかりました。もちろん、宮津パークのオーブニングセレモニーとメインのパーティーでは、市長さんの日本語、次に私の英語で、何回かのあいさつをやり遂げました。

英語を公用語とする人たちに前にやるのですから、勇気がいりました。早とちりもやってみました。今思うと、市長さんの言葉を英訳すること自体、不慣れと英語力不足で大冒険だったようで、出発までの四、五日間はそれに全力投球しなければなりません。服装にもポイントを置き、若々しい感性で外国事情をキョロキョロ見て来

たいと思っていました。出発の段階で同行の女性に後れをとっていました。

しかし、八日後の解散の時には、向こうでの交流に大満足だったので、そんな気持ちはすっかり消えていました。

ネルソン市では、ウーラストン市長さん、ジョーンズ姉妹都市委員会長さん、谷口禎一ニュージーランド大使の出席のもとに、ソロプチミストの方々、その他各団体のスタッフと歓談させて頂きました。

マオリ族の伝統的な踊りで歓迎を受けました。はじめてそれをマオリの集会所で見た時、ドキッとする迫力と異様な雰囲気、に圧倒されました。「ハカ」と呼ばれる戦士の儀式などを組み合わせ、「死ね」という表現で舌を思いきり出し、手にこん棒やヤリを持って、大きな叫び声をあげて相手を威かくする仕草は、シヨールと分かっているとい身構えていました。

弱肉強食で戦いに勝ち残った先祖の血なのでしょうか、男性も女性も皆逞しい体をしていました。鼻と鼻を二度くっつけて「キオラ」（やあ、元氣）と挨拶する風習に慣れた頃、マオリ語が日本語の発音とよく似ていること、男性優位社会であること、伝統を守り継承しているところ、と、伝承を守り継承しているところ、とする問題点はこの国でも大差はないこと等が分かりました。

例の踊りでも、ギター一本、かけ声一つで十何人という一団の呼吸がぴったり合う不思議は、国をあげての保存、発展が行われ、民族文化として、たえず観光客に披露されているからでしょう。

集会所兼民族館には、先祖代々伝わる彫刻や装飾品が陳列されていて、彼らの歴史をかいま見ることが出来ました。木に彫ることが文字であった当時の人々の思いが、シンメトリーの模様深く彫り込まれていました。若い世代はこうした独特の文化

を引き継ぐことを嫌い、マオリ語を解さない者も多く、木彫りも機織りも工芸学校で教えなければならぬのが現状のようです。白人の奥さんのいる家族に何組も出会いました。

最近、若者のドラッグや不法侵入等の軽犯罪が増えているそうです。マオリの集落で見た、観光客が投げ込むコインを、争って橋の欄干から飛び込み拾いあげてはしゃいでいた男の子たちの姿が重なります。澄んだ川とお金と子ども……、考えていくと、地球のあらゆる場所でも国際化が進み、異質のものが同化されていく姿に思えてきます。

サンシャインシティー、緑のカーペットと緑の丘陵、羊、羊の群れ、前庭の美しい家々の並び等、私たち観光客には穏やかに見える平和な国であり、見あきることのない緑の濃淡とそれらが描く曲線、河畔の柳の大木と藤の花、花の咲き乱れる庭園、のんびりとした人々の動きがカ

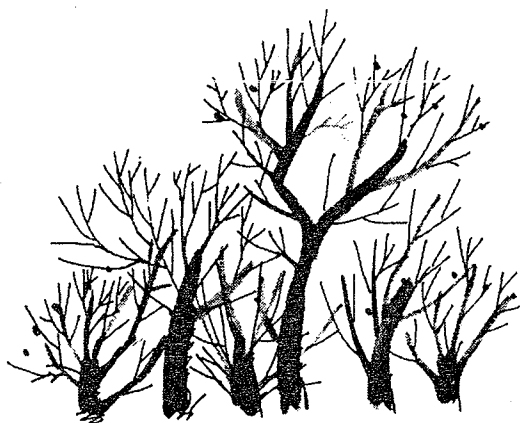
ラーで浮かんでいきます。

パーティーの席、人の集まる所では、いつも私は陽気です。常々、無芸大食と公言しているので、十二分に食べて満足感でコロコロしています。トピックにも困ることはありません。「オーサンキュー」「アイム・グラッド」「パードン」「アイム・ソリ」等と、大きな声も日本式発音も気にせず大胆なもので、笑いが生じて交流が始まります。おしゃべりでよかったです。思います。

二度着物を着ましたが、日本的な伝統にコミュニケーションが加わって初めて国際親善が生まれると、会話の必要性を言い続けています。随行案内してくれた女性、ボランティア通訳をしてくれた人たちが輝いて見えました。言葉の壁をクリアして環境に順応しておられたので、羨望し通しました。

国際化は進み、やがて「国境を越えて」が死語になるかもし

れません。私のニュージールランドでの見聞録はエンドレスです。一期一会で得た沢山のものを振り返るためにも、エイボン川にかかる「追憶の橋」を思い、この先何度も立ち止まろうと思います。新たな旅にも挑戦したいと思います。サンキュー。



郷里に於ける澤井市造話題(十二)

作 中西 孫兵衛(先々代)

由良の歴史をさぐる会 四方 寿 朗

港湾改築工事に於ても本末を誤る工事も無きにあらず凡も是等は宜しく沖より眺め渡せる即ち船本位に築くべき物なるにも不拘単に陸上より視たる所謂陸的本位たる仕様設計が沢山あり偶々以て失敗を招く原因とす愈成功の暁には工費の比較否目的が不充分なりし為め如何ともすべからざる有様に陥るのです舞鶴湾工事も拝見致せしが果して誰人の手に設計されしものか折角の工事を誤り居る点多々あるべしと考ふ矢張陸的本位の設計たるを免れぬならん今少しく大々的計畫をこそと思ふ貴下は関係なきや否や知る処にあらずといへども熟慮一番他日の悔無からんことを現に我々が従事中なる基隆港の如き最初の設計よりも更

に数倍の大工事となりつゝあり云々私は今度は総裁に押され村長は事務長として頗る繁忙なりし故に巨細を知る能はず郡長との対談約二時間以上にて休憩室に談話の花を飾りしが惜しや其の一朶の一齣に止りしを
 豫定の宴会に移る其日の来賓は左に
 正席東 郡長 山縣 鉄之助氏
 次席 郡視学 大野 亀郎氏
 正席西側に 澤井市造氏
 次席 澤井 藤吉氏
 東側ニ 神崎村長 森本 嘉右衛門氏
 二ニ 東雲村長 辻本 猪之助氏
 三ニ 丸八江村長 中西 鶴藏氏
 西側ニ 中筋校長 岡本 季吉氏
 二 八田校長 塩尾 勇一郎氏
 三 中山校長 今安 甲一郎氏
 四 神崎校長 塩見 富士馬氏

以下 由良校職員 村有志者 東側ニ 由良村名誉職員 村有志者 接待員に 小林文藏 杉本又吉 中西一雄 及び 役場員 黒田校長 大森清四郎 中西孫兵衛等にて 休憩室接待員として 茶菓並に 煙草乃火等の給仕は 中西吉郎 右エ門 陳列室 書画の守衛に 大森慶藏といふ席なりし
 澤井君当日の演説の要略左に
 尤も 話演説は 記憶に存せる一斑を記するに止る
 諸君私共ハ甚タ高席ヲ汚ガシ失敬致シマスガ坐ナガラ此高席ヨリ一言御挨拶申上マス先刻ハ郡長閣下ヨリ過分ナル御賞詞ヲ蒙リ身ニ餘レル光栄ト存ジマスガ是ハ私ノ精神ニ置キマシテハ恥カシキ次第アル何トナレバ元来教育ノ事タルヤ誰シモ其ノ責任アリ其ノ義務アルベキコトト思フノデ僅ニ其ノ一端ノ義務ヲ報ジタルニ過ギサルニ却テ御賞詞ニ預ルハ敢テ当ラナイト思フ諸君ニ於カセラレテモ此ノ重大ナル責任及ビ義務アル教育上ノ

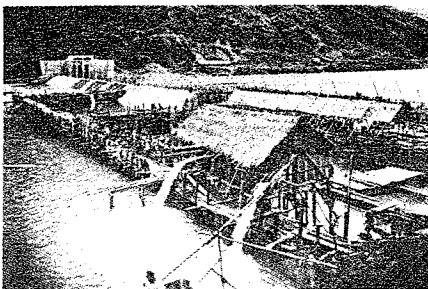
普通発達ヲ企劃セラレ御心配下サレタ結果トシテスル完全ナル設備ヲ見ルニ至ツタノハ一ニハ時勢ノ進運之ヲ促シタノデアラウト思ヒマス 借々過去ヲ憶ヒ起シマスレバ我々ノ兒童ノ時代ハ大ニ趣ヲ異ニシ 国家ノ趨勢日進月歩 頗ル長足ノ進歩発達ヲ来シ随テ教育ノ施設改善モ着々其ノ歩ヲ進メマンテ本校建築美拳アルハ敢テ徒爾ナラスト信ジマス 借私共ハ諸君ノ知ラル、如ク幼ヨリ無教育ニ人ト爲リマシテ殆ド一丁字ダモ解シ得ナイモノデスカラ教育ノ学理トカ学説トカ左様ナ高シク話ハ到底話スベキ資格モナク実力モナイ、デスガ然シ乍ラ私共ノ常ニ感シマスハ人生ニ於テ教育程重要ナルモノハアリマス マイ殊ニ幼年ノ時季ニ於テ最モ切要デアリマス 善良ナル習慣ヲ養成スル、申迄モナク夙ニ勇往邁進弊テ後止ム 仮令如何ナル艱難ニ逢フモ之ニ打勝トイフ 忍耐克己ノ心ヲ養ヒ 頭腦ヲ練磨サセルトイフ事

ハ現代教育ノ大基礎トシテ特ニ
力ヲ用ヒラレシコトヲ切望致シ
マス之ヲ先生方ノ御言葉申サ
バ所謂精神修養トモ申サルトデ
セウ苟クモ放漫怯懦ニ育ニナバ
他日優勝惨敗ノ劇シキ生活的戦
争ノ臨ミ空ク敗者ノ悲惨ニ立チ
人生ノ目的ヲ無意義ニ終ルコト
ニナリマス要スルニ社会ノ一人
トシテ常ニ奮闘ニ耐ウル身心ヲ
鍛錬シ瓦トナランヨリハ玉璧ト
ナル教養ヲ与ヘラレタイ是ハ獨
リ先生方ニノミ御願スルノデナ
ク諸君ガ家庭又ハ社会ニ於テモ
俱々手ヲ引キ合テ力ヲ盡サレタ
ク又一面ニ於テハ由良村ノ風習
ヲ矯正シ監視サルノ責任ハ申迄
モナク諸君ノ御聴取ナサレ様ニ
ヨツテハ私ノ営業上ヨリ割出シ
タ我田引水トノ御感シアツテハ
迷惑ト存ジマスカラ尚念シテ申
上マス此働クト力奮闘トカ申上
マシタノハ広キ意味ニ於ケル言
葉デ各其本分タル業務ヲ指シタ
事デ凡如何ナル業務ヲ問ハズ熱
心誠意ヲ以テ根氣能ク働ク程其

ノ利益ノ広大ナルモノハアリマ
セヌ之ハ諸君ノ夙ニ御諒知ノ事
デアラフト存ジマスケレドモ常
ニ感ジテ居マスコトヲ申上ルノ
デアリマス却説働イテ何ノ爲ニ
スルカト問ハレナバ私共ノ希望
シテ居マス働ハ個人的ノ働デナ
イ公共的大ニシテ曰ハ国家的ニ
働クノテ即チ人は人ノ爲メニ働
ケト云フノデアアル之レ蓋シ国家
ヲ組織シ社会公德ヲ布クノ基デ
然モ自家自己ヲ保ツ所以デアラ
フト考ヘマス若シ之ニ反シ怠慢
ニ流ルトトカ利己主義ニ趨ルト
セバ其ノ及ブ処ノ悪影響ハ単ニ
自己ノミニ止ラズ追テ国家ノ組
織ヲ危クシ社会公德ノ壞類ヲ招
ク由々敷大事トナルノデアリマ
ス茲ニ於テ教育ノ寸時モ忽諸ニ
付スベカラザルコト昭々トシテ
火ヲ睹ルヨリ明デアリマス僅ニ
一町村ノ指導ト雖モ其良否ノ関
係ハ実ニ容易デハアリマスマイ
私共ハ本村ニ本籍ヲ持ツモノデ
アリナガラ始終遠方ニ隔在シテ
由来何等貢献したことの無いの

は甚ダ漸愧ニ堪ヘヌ次第デアリ
マスガ今後若シモ私ノ身ニテ務
マルコトガアリマシタレバ何ナ
リトモ御用ヲ仰セ付ケラレタイ
喜ンデ相応ノ務ハ致シマセウ今
日ハ数ニモ足ラヌ私迄モ御招待
ニ預リ斯克モ盛大ナル落成式ノ
祝宴ニ陪スルヲ得マシタノハ多
大ナル幸栄ト感謝スルニ辞ナキ
次第二アリマス終ニ臨ミ本村及
本校ノ隆盛ト諸君ノ健康を祈ル
右大畧ノ趣意のみ素より遺漏な
り錯誤等多々あるべく三年前に
遡り当時の記憶の一端を喚起せ
しに止まり之を以て全壁と云ふ
べきにあらざるは敢て茲に陳謝
す此時は小室氏の宅に滞在せら
れ其夜訪問私は同君に対し「今
日の演説は近來の上出来と感心
した君は何日の間に学問したわ
と申せば「ナニ新渡戸博士に聞
きしに乃公の常に思ふて居た通
の話であつたからもう大丈夫乃
公の考に間違つては居らぬのだ」
と答へらる

居た頃一夕寄席へ話を聞きに行
きしに講話師が壇に立ち「運と
いふことは能く働くことを云つ
たので皆さんが多忙極む時は
宛然軍の様だと申さるゝでせう
其の軍の字に之をかけたら層一
層働く意味になる夫が取も直さ
ず運だ」と滑稽的に話したが此程
確かに真理ありで一生涯懸命に働
いた結果が運となるのだ物は兎
角聞き方が上手なれば利用が出
来るもので乃公は成程と感じ大
に心を持ち直し以来奮然として
大に働く氣になつた」と大に笑つ
て語られた



台北第二発電所堰堤工事現場

秋のたてがみ

中西夏江

ほのあかき大地とならん高はらはぶな千万の黄葉零らす

ぶな林の風透きて見ゆ 全黄の上枝明けし秋の稜線

いよいよに秋日は澄みてきわまりてぶな高はらの黄葉無尽

のぼり来てしずけき心 ややほめく森に還るなきいくばくの夢

ぶなの森の葉がくれ淡き午後なれば面差しひとつほろと戦ぎぬ

黄葉の終のいのちのほの明りさわさわとうすき風翳りつつ

草もみじから紅の寂しさに揺れて明るむ味土野への道

妻ガラシャを恋いて馬駈け越えしとぞ海拔五百米この内山峠

蒼く燃えし聡明機警の忠興が馬上はるけし 秋のたてがみ

森なかの大气露けしかかる日をまぼろしとなる忠興が見ゆ

ガラシャ(一五六三—一六〇〇)は、細川忠興(一五六三—一六四五)の妻。

織田信長に仕えた丹後宮津城主の忠興は、妻ガラシャの父、明智光秀が信長を害した時、その招きに応ぜず(ガラシャは味土野に三年幽居)、豊臣秀吉、徳川家康に力して軍功を積み豊前小倉に移封。忠興の東征中、ガラシャは自刃。

一六二〇年隠退した忠興は、和歌・絵画に通じ、茶の湯は千利休門下七哲の一人に教えられた。
※内山峠は大宮町字五十河。味土野は弥栄町。秋の峠に立って眺める山の稜線は、それはまさしく「秋のたてがみ」の重なりであった。

由良の歴史年表について

公民館文化部

今年、森鷗外の小説「山椒太夫」が発表されてから八十年、由良小学校に校歌が出来て六十年——に当たります。

そして、二十一世紀も、もうすぐそこまで近づいて来ました。

そんな意味合いもあったりして、「由良の歴史年表」を作ってみました。

由良自治会記録、丹後資料館の出版物、宮津市史、また舞鶴や宮津の図書館資料等、その他を参考にしましたが、まだ不十分で下書きの段階です。皆さんから、ご意見やご指摘を頂き、加除訂正の後、仕上げたいと考えています。

年表は、十一月五日の文化祭の日から、里センターに掲示していますのでご覧頂き、お気付きの点を公民館の方へお申し出

くださいますようお願いいたします。

私達ふるさと由良の年表作り、一人でも多くの方が参加してくださいますようにと期待しています。

- ・ 由良城？ その山城跡は？
- ・ 由良小学校の始まりは？

- ・ 水戸口が一つに閉じて、牛や自転車か神崎へ渡った？

等々……調べていけば数々の興味湧き、先人達の労苦が偲べれます。

終わりにりましたが、年表作成上で先輩諸氏から、ご懇切なご指導を賜り誠に有り難うございました。ここに厚く御礼を申し上げますと共に、尚今後とも一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

由良の歴史年表 (参 その1)

100	200	300	400	500	600	700	800	900	1000	1100	1200	1300	1400	1500
<p>由良 600年</p> <p>如堂寺地蔵菩薩(伏魔作) 1095(1099)</p> <p>如意寺創建(一世紀後開基)</p> <p>奈具神社創建(式内社)</p> <p>由良の戸の歌(百人一首) 菅原野志(980)</p> <p>713年運河工断、今立(井原佐とことら)</p> <p>大地震(七二一年三月廿日)より五日間、石室をも(古墳(上石浜)見守山麓)と見取野</p> <p>御碑(由良菩提山殿 二塚の上)</p> <p>新土土器(上石浜古地)</p> <p>由良の歴史(一)村</p>														

(参 その2)

時	代	幕	末	明	治	時	代	明治時代	大
1878	由良七百石船	1845	山庄略由来の版木	1841	由良の埴浜の長	1845	由良の埴浜の長	1845	由良の埴浜の長
1846	水戸工事	1846	由良の埴浜の長	1847	由良の埴浜の長	1847	由良の埴浜の長	1847	由良の埴浜の長
1846	由良神社建立	1846	由良の埴浜の長	1847	由良の埴浜の長	1847	由良の埴浜の長	1847	由良の埴浜の長
1854	由良の和鞍馬	1854	由良の埴浜の長	1854	由良の埴浜の長	1854	由良の埴浜の長	1854	由良の埴浜の長
1856	由良の和鞍馬	1856	由良の埴浜の長	1856	由良の埴浜の長	1856	由良の埴浜の長	1856	由良の埴浜の長
1877	由良村由良分署設立	1877	由良の埴浜の長	1877	由良の埴浜の長	1877	由良の埴浜の長	1877	由良の埴浜の長
1879	由良村由良分署設立	1879	由良の埴浜の長	1879	由良の埴浜の長	1879	由良の埴浜の長	1879	由良の埴浜の長
1887	由良村由良分署設立	1887	由良の埴浜の長	1887	由良の埴浜の長	1887	由良の埴浜の長	1887	由良の埴浜の長
1891	由良村由良分署設立	1891	由良の埴浜の長	1891	由良の埴浜の長	1891	由良の埴浜の長	1891	由良の埴浜の長
1895	由良村由良分署設立	1895	由良の埴浜の長	1895	由良の埴浜の長	1895	由良の埴浜の長	1895	由良の埴浜の長
1902	由良村由良分署設立	1902	由良の埴浜の長	1902	由良の埴浜の長	1902	由良の埴浜の長	1902	由良の埴浜の長
1903	由良村由良分署設立	1903	由良の埴浜の長	1903	由良の埴浜の長	1903	由良の埴浜の長	1903	由良の埴浜の長
1905	由良村由良分署設立	1905	由良の埴浜の長	1905	由良の埴浜の長	1905	由良の埴浜の長	1905	由良の埴浜の長
1907	由良村由良分署設立	1907	由良の埴浜の長	1907	由良の埴浜の長	1907	由良の埴浜の長	1907	由良の埴浜の長
1909	由良村由良分署設立	1909	由良の埴浜の長	1909	由良の埴浜の長	1909	由良の埴浜の長	1909	由良の埴浜の長
1911	由良村由良分署設立	1911	由良の埴浜の長	1911	由良の埴浜の長	1911	由良の埴浜の長	1911	由良の埴浜の長
1912	由良村由良分署設立	1912	由良の埴浜の長	1912	由良の埴浜の長	1912	由良の埴浜の長	1912	由良の埴浜の長
1913	由良村由良分署設立	1913	由良の埴浜の長	1913	由良の埴浜の長	1913	由良の埴浜の長	1913	由良の埴浜の長
1914	由良村由良分署設立	1914	由良の埴浜の長	1914	由良の埴浜の長	1914	由良の埴浜の長	1914	由良の埴浜の長
1915	由良村由良分署設立	1915	由良の埴浜の長	1915	由良の埴浜の長	1915	由良の埴浜の長	1915	由良の埴浜の長
1916	由良村由良分署設立	1916	由良の埴浜の長	1916	由良の埴浜の長	1916	由良の埴浜の長	1916	由良の埴浜の長

編集後記

月日の経つのは早いもので、早、年賀状のシーズンとなりました。

今年、国の内外で大きな事件が数多く起こりました。由良区での出来事や公民館事業について静かに思い返しなが、新しい年は是非、良であってほしいと願うばかりです。

地区の皆様を支えられながら、「公民館だより」も本号で九十七号の発刊となりました。これ偏に諸先輩のご努力の賜と深く敬意を表しながら、今後一層、地区の皆様が親しまれ、愛読される小冊になるよう願っています。

新しい年が、地区の皆様にとり限りなく良い年でありますようお祈り致します。(山下記)

